未刊謠曲集

十四

田中允編

古典文庫

未刊謠曲集

十四

田中允編

古典文庫

古典文庫第二六八冊

昭和四十四年十月二十日印刷発行

非売品

未刊謡曲集 十四

編者 田中允

発行者 吉田幸一

東京都板橋区熊野町三四

印刷者 帝都印刷製本株式会社

発行所 114 東京都北区西ケ原三ノ三四ノ一二 古典文庫

電話(九一〇)二七一七

振替口座東京一四五九七番

目次

凡　例……五
伝本略号略解……七
各曲解題……八
本　文
蛇雉子……（八）……二九
宝　石……（八）……三三
望夫山（望夫石？）……（八）……三五
木母寺（梅寺）……（九）……三九
細江川……（九）……四四
螢（浅茅が原・浅茅螢・浅茅）……（九）……四七
牡　丹……（一〇）……五四
牡丹燈籠（牡丹燈・荻原）……（一〇）……五八

法花寺……（一一）……六三
北国落（大津次郎）……（一一）……六六
仏相撲……（一一）……七一
郭公……（一一）……七四
孫三郎（織殿）……（一二）……七八
雅木……（一二）……八二
松嶋……（一二）……八四
松浦姫……（一三）……九五
間守塚……（一三）……一〇三
丸子（みうへが嶽？）……（一四）……一〇五
万戸……（一四）……一一〇
万葉菊……（一五）……一一三
御影堂……（一五）……一一七
見返仏……（一五）……一二〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

三笠竜神（三笠山竜神）……（一五）……一二三
三河猩々（駒形猩々）……（一六）……一二〇
三河千手（御室千手・児千手）……（一七）……一二二
水鏡……（一九）……一三六
御田植……（一九）……一四二
三股……（二〇）……一四九
緑丸……（二〇）……一五二
南淵山……（二〇）……一五五
水馴川……（二一）……一五七
御法舟……（二二）……一六一
壬生……（二二）……一六三
脈論（丹溪問答・朱丹桂）……（二二）……一六七
都松……（二三）……一七五
宮嶋竜神……（二三）……一七八

宮滝……（一三）……一八〇
昔語……（一三）……一八二
武蔵野盃……（一三）……一八七
武者桜……（一三）……一八九
六田淀……（一四）……一九一
棟渡……（一四）……一九四
村烏……（一四）……一九六
村田……（一四）……一九八
名月賀茂……（一五）……二〇一
紅葉見……（一五）……二〇四
師都……（一五）……二〇七
師盛……（一六）……二一一
門破（朝比奈）異本……（一六）……二一七
追記・訂正……二二一

凡例

一、第十三冊に引続き、発音別五十音順に並べた仙台本第一種の未刊曲のうち、「蛇雉子」から「門破」までの四十九番を収めた。

一、飜刻はすべて原本通りにし、私意を加えたところは（　）でくくった。

一、原本には段落はないが、編者の見識で改行した。

一、異本との校合は特に注意すべき所だけにしぼった。

一、節附は印刷の都合上省略した。

一、「次第」「舞」などの演出上の重要記号は出来るだけ残したが、打切を意味する「打」間拍子を意味する「ヤ」「ヤハ」地拍子を意味する「トル」「ヲクリ」などの特殊記号は省略した。

一、「　印は原本に固執せず、詞の所（節附のない所）は「、節の所（節附のある所）は〻を付けて区別した。原本は「のみで〻はなく、「もない場合が多い。

一、句読点は原則として原本通りにしたが、元来句読点は節譜の一種であって、

韻文の切れ目とは必ずしも一致しないから、韻文(節附のある部分)の拍子合わずの所は七五調を基準とする一節を一句と考え、拍子合いの所は八拍子を基準とする一区切を一句と考え、これらの区切の所に句読点のない場合は、それぞれ一字分空白にした。しかし原本は節附が粗雑で間拍子や地拍子の補助記号を脱している場合がしばしばなので、どこが八拍子一節の切れ目か判定に苦しむ場合に時々出合った。その場合異本があればそれが参考になったが、異本のない場合、異本があってもよくわからない場合などは、自信なく空白を設けたこともある。

一、濁点は、原本にある場合、異本を参考にして補った場合、編者の見識で補った場合の三つに分けられ、第三の場合が最も多いが、清濁いずれか不明の場合はそのままにした所もある。

一、曲名の下の数字は、底本の巻序を示した。六4は六の組の第四冊、単に2は無印組の第二冊の意。

伝本略号略解（五十音順）

第十四冊所見の伝本の略解。各伝本の解題は未刊謡曲集第一・二・三・六・九・十一・十二冊にあり、それぞれ1 2 3 6 9 11 12でその所在を示す。

朝……朝日本（1 2は第一種第二種以下これに準ず）……2
井……井上本……1
石……石田本……1
今……今井本……3
上……上杉本……1
江……江崎本……1
樺……樺表紙本……1
観……観世本……9
吉……吉川本……1
京……京大本……1
元……元文写本……1
五……五百番本……1
国……国学院本……1
佐……佐野本……1
斎……斎藤本……1
下……下村本……1
仙……仙台本（第八冊以下の底本）……1
田……田安本……1
田下……田中下懸本……1
内……内閣本……11
能……能勢本……1
春……金春本……6
樋口……樋口本（第一——三冊の底本）……12
松……松平本……1
毛……毛利本……1
吉田……吉田本（第三——七冊の底本）……23
米……米沢本……6
柳……柳洞本……12

各曲解題

蛇雉子（へびきじ）〔下〕吉田名寄・松尾名寄に見えるのみ。近世の作か。

宝石（はうせき？たからいし？）名寄にも見えない珍曲だが、クセ上ゲの「かけまくは」から「いますつくしはたうときろかも」までは明和独吟巻一所収の謡物「深江石（フカエイシ）」とほぼ同文。しかしこれは両者共万葉集巻五所収八一三番の鎮懐石の長歌によったもので、両曲の作曲が全く異っているから、両曲間に直接の関係はないらしい。ワキの着ゼリフのところには「たから石のあたりに着て候」とあるから、曲名はタカライシがよいかと思われるが、ゴマ点のあるところはいずれも「宝石」にゴマ点四つだから、ハウセキと音読したかも知れない。能としての面白味はなく、文辞も稚拙。万葉集に直接取材しているから、近世になって万葉集が読まれるようになってからの作と考えられる。（万葉代匠記は元禄三年頃完成）

望夫山（ばうふざん）別名……望夫石？〔田・下〕吉田名寄・尊経閣本謡名国付以呂波寄後人加筆の部・享保六年観世大夫書上所載謡名寄・明治の松尾名寄などに見

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

えるのみだが、明治の大和田名寄(明治三十三年大和田建樹著謡と能所載)所見の「望夫石」は本曲の別名かも知れない。文辞脚色共に稚拙であるが、伝本が少しあるから、近世初期の戯作か。

木母寺(ぼくぼじ)別名…梅寺〔下〕下村本は外題「むめ寺」内題「木母寺(ボクボジ)梅寺トモ」とある。角田川の影響作で、梅若丸(未刊謡曲集八所収)などと同材だが別曲。吉田名寄・松尾名寄に見えるのみ。梅若乃至梅若丸と題してもよいのに敢て木母寺乃至梅寺などとあまり一般性のない題名としたのは、既に梅若丸(別名梅若)が作られていたので同名を避けた結果かと思われ、梅若丸(近世初期頃作か)よりは後作であろう。

細江川(ほそえがは)名寄にも見えない珍曲。「しらま弓云々」の歌は万葉集巻十二に見えるから、万葉集が読まれるようになった元禄頃より後の作であろう。(万葉代匠記は元禄三年頃完成)文辞脚色共に拙。戯作群の一つ。

螢(蚘)(ほたる)別名…浅茅が原・浅茅螢・浅茅〔元・吉・田・田下・下・朝1・内・柳〕田・吉・田下・内は「蚘」朝1は「浅茅螢」とあり別名を「浅茅原・螢」

柳は別名を「浅茅・浅茅が原」下も別名を「浅茅ケ原」とす。石田本笛手附に笛の頭附が見えるから、上演されたこともあったと思われ、伝本も多いから、室町期の古作の可能性が強い（柳洞本は貞享元年の写しだから、勿論それ以前の成立）。名寄類には不思議に所見少く、螢としては吉田名寄・江崎本遠キ諷組・井上本八百番名寄に、浅茅原としては江崎本遠キ諷組に、浅茅螢としては尊経閣本謡名国付以呂波寄後人加筆の部に見えるのみ。柳洞本は底本と小異。下村・朝日両本は殆ど同文だが底本とも柳洞本とも小異。

牡丹（ぼたん）〔下・吉〕享保九年版兼珍小謡以下小謡集に散見する「ぼたん」は本曲のクセ類似の「たそかれのほのぼのと」以下「実面白き今宵かな」までと全く同文同節付であるが、名寄類には所見珍しく、江崎本遠キ諷組・松尾名寄に見えるのみ。文辞脚色共に精彩を欠く。近世になってからの作であろう。

牡丹燈籠（ぼたんどうろう）別名…牡丹燈・荻原〔下・観〕観世本は荻原とあり別名を牡丹燈とす。牡丹燈籠としては吉田名寄に、牡丹燈としては江崎本遠キ諷組・松尾名寄に、荻原としては尊経閣本謡名国付以呂波寄後人加筆の部に見えるの

み。寛文六年三月刊の浅井了意の御伽婢子巻三所収の「牡丹燈籠」によったことは明らかで、同巻所収の「梅花の屏風」によった歌屏風（新謡曲百番所収）と同趣向である。ロンギの終りは黒塚、キリは女郎花の影響を受けている。

法花寺（ほっけじ）外題は法華寺とある。名寄にも見えない珍曲。横笛物であるが、三種ある横笛のいずれとも別曲。文辞脚色共に稚拙。近世の戯作であろう。

北国落（ほっこくおち）別名…大津次郎〔下〕下村本・吉田名寄に別名を大津次郎とす。吉田名寄以外には名寄類に所見がないが、文辞脚色は比較的整って居り、大津へ着くまでの道行は安宅を、琵琶湖を渡って海津に着くまでは竹生島を、それぞれ念頭に置きながら、まる写しでなく叙述しているところには、文才にやや見るべきものがあり、義経記巻七大津次郎の事によったと思われる。

仏相撲（ほとけずまふ）〔田・下〕吉田名寄・松尾名寄に見えるのみ。文辞は比較的整っているが、説話風に作られて居り、能としての面白味は少い。近世の作であろう。

郭公（ほととぎす）〔吉・田・田下・内・下・観〕下・観両本は上懸節附で、底本・

吉・田・田下・内の下懸節附の諸本群とは大異あり、別に後刻飜刻。鴻山文庫蔵金春伝書所収謡名寄・江崎本遠キ諷組に見えるのみ。伝本が多く、異本もあるから、室町末か近世初期頃の作であろう。

孫三郎（まごさぶらう）別名…織殿〔下・観〕下・観両本共に別名を織殿とす。吉田名寄に見えるのみ。内容的に見て近世の作と見るべきである。

雅木（まさき）名寄にも見えない珍曲だが、内容は極めてお粗末。代表的な近世の戯作。

松嶋（まつしま）〔仙6〕仙6は底本の本文を記し、それに補筆訂正を施した改訂本であって、仙8に伝わる「松嶋手数附」（松嶋の型附）はこの改訂本の方によっている。仙8には間狂言も記され、手数附と共に飜刻附載した。松島に取材した曲は外に「塩竈（名所松島・松島とも）」（未刊謡曲集十一所載）「松嶋十八景（自井松嶋とも）」（未刊謡曲集十七に収載予定）別曲「塩竈（元禄十四年新作、宝永七年頃の版本あり、仙8所収の塩釜間はこの曲の間狂言）」などがある。本曲は「小萩」（未刊謡曲集十所載）と共に仙台本にしか伝わらず、小萩と同じく仙6に改訂本文を伝えているから、小

萩と同様に、伊達家乃至仙台地方の好事家の作であろう。名寄類には吉田名寄・尊経閣本謡名国付以呂波寄後人加筆の部・江崎本遠キ諷組などに見えるが、本曲か塩竈の別名の方か不明。

松浦姫(まつらひめ)〔下・田〕下村本外題に「松浦梅」とあるのは内題の「松浦姫」で訂正されるべきであろう。世阿弥自筆本もある「松浦」(通名松浦鏡)も松浦姫と別称するが、勿論別曲。貞享四年版能訓蒙図彙以下諸名寄所見の松浦姫は国付のあるものはすべて肥前となって居り、別名を松浦鏡と註している名寄も散見するから、これらはその殆どが松浦鏡を指すらしい。本曲は生贄物で陸奥安達郡の古池に伝わった民話によったらしい面白い内容で、能としてもやや見るべきものがある。近世初期頃の作か。

間守塚(まもりづか)名寄にも見えない珍曲。垂仁紀の田道間守の記事と万葉集巻十八の橘歌及びその反歌(四一一一・四一一二)によっているが、単なる筋書風で能としては稚拙。万葉集が読まれ出した近世になってからの古典好きの人の戯作であろう。

丸子（まるこ）別名…みうへが嶽？〔下・田・樺・観〕下村本外題には「まる子」とあり、本文にも下村・観世本は「丸」に「ル」を送っているから、吉田名寄に「マリコ」と傍訓しているのは誤であろう。名寄類にはその外元禄四年写の「謳百番目録」（能楽研究所蔵、樺表紙本に一部一致）享保六年観世大夫書上所載謡名寄などに散見。みうへが嶽鬼神退治説話によっているから、「みうへが嶽」と別称したかと思われるが、みうへが嶽は能本作者註文系諸本に観世弥次郎作とある。本曲は弥次郎好みの大勢出演するにぎやかな曲で、文辞脚色にも見るべきものがあるから、観世弥次郎長俊（天文十年五十四才歿）作のみうへが嶽は即ち本曲と見てよいと思う。

万戸（まんこ）名寄にも見えない珍曲だが、筋書のような稚拙作。近世の戯作であろう。ワキが日本へ渡るところは八島・野守などの先行謡曲の文章を借用している。本文中に万戸の名は出て来ないが、大職冠（未刊謡曲集十一所収）には面向不背の玉を竜宮から取り返したのは万戸（まんこ）となっているから、本曲のワキも万戸であり、そこから万戸と名付け、本文中に万戸の名を出し忘れたものであろう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb